

第2回文化芸術推進計画検討協議会振り返りシート

1. 質疑応答

項目	主な意見	対応案
調査時期	● 時期的なことに関して、12月2日～23日の3週間の時期的な根拠や意図はあるのか。	● 時期については、事前に検討協議会でご確認いただいた上で調査を実施したいという意図であった。
配布数・回収率	● 3,000という配布数の根拠は何か。 ● 無作為に3,000名を抽出しているが、回収率は半分以下である。回収率の目標は立てたのか。 ● アンケートの回収率、回答率は気にする必要はないのではないか。そもそも文化が自分と関係ないと思っている人は一定数存在する。	● 配布数は前回と同様であり、前回は郵送による配布と回収を行ったが、今回は、郵送による配布と、郵送とウェブによる回収を行った。さらに、締切り1週間前に郵送による回答の催促をしている。前回は回収率が38.8%であり、それと比較するとやや落ち込んでいるが、回答数については有効回答数を得られたと考えている。
10年間の成果（アンケートで分かったこと）	● 前回とほぼ同じアンケートの内容だ。この10年間で何が成果だったのか、このアンケートで分かるのか。また、綿々と受け継がれているべきものは何か、今後のあるべき姿を決め、その引き算のギャップがアンケートに出て来ないとおかしいのではないかと。PDCAがアンケートから読み取れるのか。 ● 前回計画で得たものと、足りなかったもの、その比較対照のようなものがこの議論に必要な。アンケートに引きずられているところがある。	● 今回の調査を当たり、現状をまずは把握したいと考えた。このため、前回との比較も重要と考え、前回調査の設問を基にしている。今回、新たに加えた要素として、幸福度や社会とのつながり等の設問はあるが、文化芸術がもたらす影響というものを把握したかった。 ● また、子どもの居場所としての文化芸術の役割なども把握したかったため、子どもについての文化芸術の設問も追加している。 ● 5年経過したことでの成果について、資料5の方で市の施策を紹介しているが、府中市では多文化共生に取り組んできたが、それが市民に届いていなかったり、民俗芸能について普及啓発を行っているが、市民は必要性を感じていなかったりなど、力を入れるべきところもあると考えている。

項目	主な意見	対応案
文化施設改修の影響	● 芸術劇場や郷土の森の改修工事がかなり影響しているのではないか。	● かなり影響があったものと考えている。令和6年度は郷土の森や芸術劇場など、市内で人気の高い文化施設が閉館しており、このような結果になっている可能性がある。今回のタイミングだけの減少の可能性はある。 ● 府中市は文化施設が豊富であり、市内で文化施設を体験する市民が、他市と比べて多いのではないかと。そうした中、市内で鑑賞していた人が行けなくなった可能性がある。
府中市での情報発信手法	● 「広報ふちゅう」は全戸配布か。	● 全戸配布ではない。
	● L I N E 等での情報発信をしているか。	● 市の公式 L I N E 等で発信をしている。
	● 財団法人等が実施しているイベントの情報については発信をしているか。	● 全てを掲載しているわけではなく、SNS 等での広報が必要な際に、各種ある SNS から選択して発信をしている。
	● L I N E では、市の重要なイベントや、ゴミの回収等といった情報と共に、青少年関係の情報や、環境問題など欲しい情報を選べるのか。	● そのとおりである。

2. 主な意見

項目	主な意見
基本的な考え方	
文化の範囲	● 文化の解釈を広く捉えることが重要である。野球はスポーツだが、野球としての歴史もあり、文化ともいえる。人間の営みに携わる様々なものが文化であるという、より広義の考え方で計画を考えていくと、障害の有無といった境界を薄めていけるのではないかと考えている。障害者の芸術活動の支援を柱としている自治体もあるが、そもそもボーダーを取り払うことを目的にするべきではないかと考えている。その人がその人らしく生きていけるように、支援する側、支援される側を充実させることが重要である。 ● 文化は辞書的な定義では人々の営み全てとされているが、そのうち、文化と言えるものは、継続性や発展性、共有性が前提となるため、文化イコール伝統文化と捉えて良いのではないかと考えている。
ターゲットの考え方	● 障害の有無ではなく、誰も様々な特性・属性を持っていることを前提に事業を展開していくべきである。母親も、母親であっても、誰かの娘であり、誰かの友人であるなど色々な属性を持っている。様々な要素を持ち合わせている個人が自分の人生の中で文化に触れる機会が増えると良い。 ● 人は多様な側面を持っているという話が出たが、それはそのとおりである。母親として子どもとイベントに参加したいと思うことがある一方、一人の女性として文化に親しみたいと思うこともあるだろう。文化に触れることで自分を取り戻し、子供とまた向き合えることもある。そのため、対象者を一面的に見ない方が良い。 ● ターゲットを決めなければ対象者に届かない。市として事業を実施する際には、どのような方法論で峻別して取り組むかが課題になる。
新型コロナや社会課題、自然災害と文化芸術の関係	● 新型コロナの影響は、次回計画の中には入れるべきである。災害が到来したときの文化活動のあり方について指針となるものをポストコロナ時代の計画には謳う必要があるのではないかと考えている。 ● コロナ禍の時は社会情勢が不安定で、区民生活が優先され美術館は二の次だった。世田谷美術館の設置者は区であり、区が閉館を命じなかったため開館していたが、開館に対して非難する声もあった。再開した際に、「作品のない展示室」という企画展をしたところ、通常時より来館者が増えたということもあった。当時の状況を整理し、府中市は府中市なりの災害時等における方針を計画に盛り込むことが重要ではないかと考えている。 ● 府中市は多摩川と接しているため、いつ災害が起こるか分からない。10年スパンで考えているのであれば、少子高齢化や環境、自然災害について考えるべきではないかと考えている。 ● レジリエンスという言葉があるが、新型コロナや震災などの災害時に文化というものをどう考えるべきかが今後必要ではないかと考えている。

項目	主な意見
文化芸術振興の方向性	● 文科省は、地方自治体は文化芸術が持つ創造性を、地域振興や観光、産業振興に横断的に活用し、地域課題を解決するべきであると言っている。文化芸術が持つ創造性を地域の社会貢献や福祉等に活かし、点から線、線から面へと、全体が豊かになる環境づくりが今後10年の課題だと考えている。 ● 事務局から次期計画に盛り込みたい視点として提案のあった障害者等の多様性の視点や若い芸術家への支援、にぎわいのあるコミュニティについては、府中市が更に取り組むべきものとする。 ● 府中市は、伝統文化を見えやすく、分かりやすくさせているという特色がある。伝統文化を今風の多文化共生や多様性の文脈に落とし込む、還元することが1つのスタンスになるのではないか。スポーツ、新しい音楽、芸能、現代美術も府中の伝統文化として発信できるのではないか。 ● 今回の計画については、令和8年度からの8年間を計画期間としているため、社会や情報の流れに柔軟に対応できる計画にすることも重要である。
市民の参画	● 市役所は、市長を中心に大きなビジョンを持ち、各課で実践していく縦割りのイメージがあるが、文化は市役所が抱えている様々な問題等を横断的につないでいくことができる共通項であり、市の課題を解決する新しい糸口を生み出していけるのではないかと。市民が、自分が持っている問題を表現することで、密着した形で解決されていく。市役所が提案するのではなく、自分たちの問題を自分たちで解決することで積極的に関わっていくきっかけになる。どのように市がバックアップし、府中市をより良くしていけるのかというところにつながっていくとおもしろいのではないかと。
文化芸術と幸福度の関係	● 幸福度の計測が興味深い。文化芸術は、様々な考えがあることを許容するし、同じであることに対する違和感を芸術は表現できる。そういった文化芸術に関わった人の幸福度が高いという結果は、新しい視点になるのではないかと。 ● 老若男女、学校や会社など様々な場所で課題があるが、異なるコミュニティを持っていたり、普段の自分とは違うライフスタイルを表現できる場があったりすることは、社会生活の中で重要な役割を果たしているのではないかと。そういったものに参画し、また、参画することを府中市が応援、促進できると、家事が忙しくて文化芸術活動に参画できないといった課題の解決ができたり、多様性や、共生社会の実現につながるのではないかと。 ● 自分の関わっている領域外との交流を通して、多様性を大事にする社会の文化を作ることによって、幸福度の向上につながるのではないかと。
【基本施策1】誰もが気軽に身近なところで文化・芸術に触れ、喜びと感動を享受できるまちづくり	
【施策1】誰もが参加できる活動や体験、鑑賞活動の拡充	
鑑賞者の減少	● この1年で文化芸術を鑑賞した人が前回調査から25ポイント減少しており、衝撃を受けている。

項目	主な意見
多様な人がアクセスできる機会づくり	● アンケート結果で、芸術鑑賞や文化活動を行わなかった理由として、「仕事や家事が忙しい」「子どもの世話をしてくれる人がいない」との回答がある。府中市では様々な催し物が開催されており、文化施設も多い文化のまちであるのに、子どもの世話をする人がいないために参加できないのはもったいない。文化を楽しむ機会や場所があるにもかかわらず、環境や属性に左右されて参加できないというのは解消できる課題ではないか。例えば、フランスでは、託児所があるケースもある。また、障害者の家族の「迷惑を掛けてしまう」という懸念を払拭するには、「どなたでも参加して良い」という文言ではなく「皆で騒いでも大丈夫です」という一言が必要である。文化施設があり、企画面も潤沢にあるならば、より多様な人が来られるよう、施設やイベントにアクセスしやすくなるような工夫が必要であり、持っているものを最大限活かすことが重要である。 ● 文化芸術に参画するきっかけがないという人が多い印象である。興味があれば動くが、興味がなければやらない。興味をもってもらうにはどうすればいいかを軸に考えてはどうか。 ● 先日、ふるさと府中歴史館に伺ったところ、入り口にすごろくゲームがあり、日本人や外国人の親子が楽しんでいた。アンケートの回答にもあるように、謎解きゲームのような参加しやすいものや、3世代で参加できるものを企画してはどうか。 ● きっかけがないことが活動に参加しない理由として多い。見たことがない、聞いたことがないところに行くことはない。どこかで聞いたことがあれば、行くきっかけになる。普段自分が接しないものにも興味を持ってもらえるよう、広報活動だけでなく、それぞれが好奇心を持って挑戦する姿勢を持つことが理想だ。 ● 体験を提供することは大人の仕事であるが、未就学児、学生、社会人、子育て層、子育てが終わって一段落している人、定年になった人等、年代に応じた種まきの方法がある。どの年齢であっても何かを始めるのに遅くないとすれば、チャンスを提供したい。社会構造はどんどん変わるが、方法論のヒントになることを計画に盛り込めると良い。
【施策2】子どもたちの文化創造体験の拡充	
子どもへの種まき	● 子どもの参加が少ない、小さな子供がいる親が参加できないということだが、興味を持ってもらえるよう各団体とも工夫して活動している。幼い頃に体験して楽しかった記憶があると、時間が経ってからまたやってみたいと思うことがあるので、実際に活動することはもちろんだが、鑑賞だけでも良いので少しでも体験しておくことが重要である。 ● 種まきについて、何かを始めるのに年齢は関係ないということも一理あるが、小さいころから体験の場を作るとは大人の仕事である。 ● 少子化が進む中で、子どもたちに関することは重要だと考えている。

項目	主な意見
	● 興味を持たせること、種まきとして体験の場を増やしていくことは重要なことだ。今後10年間を見据え、どのあたりを府中市がバックアップし、打出していきたいのかを考えて、興味や体験につながる仕掛け方を検討することが重要である。 ● 世田谷区の鑑賞教室は、1年間で約1万人の小中学生が来館する。鑑賞教室でどのような体験を与えるかは常に議論しており、現在は、少人数のグループごとに人生経験豊かなボランティアを一人付けて、案内を任せている。2時間程度の鑑賞の中で、子どもたちにとって案内ボランティアが大切な人になり、帰りには握手をする様子も見られる。何を見たかは覚えていなくても、個性豊かな大人に出会った経験をした子供たちが将来の美術館の顧客になる。飲み屋でも常連客が売上の8割を支えているという。コアなファンを醸成するためには、口コミが大事だ。
【施策3】文化に対する支援環境の整備	
文化施設のあり方	● 文化センターと小学校が避難所となっているが、文化という側面から考えた際に、場所として適切か考える必要がある。 ● 文化のコミュニティスペースを作っていくこと、サードプレイスとしての文化施設という言い方もできる。 ● 老朽化の課題がある。文化芸術事業を行っている施設は限られているのではないか。府中の森芸術劇場、美術館、都立府中の森公園の周辺は文化芸術と触れ合う場所として貴重な場である。
最先端の情報発信の取り入れ	● 催しやイベントの情報をどのようにキャッチしてもらうかが課題である。情報をキャッチできなければ、新しい人との交流につながらないからである。今後10年は、情報の取得方法が年齢や生活スタイルによって大きく変わっていくと思われる。時代に合わせた方法を取ること、新しい方法を市民に伝えていくことの2つが重要ではないか。若い人から年配の人までを取り込めるような情報発信について計画の中に盛り込んだ方が良い。 ● 広報宣伝はこれまで紙媒体中心だったが、今後は配信が中心になるだろう。一方で、受け取り手が追いついていない側面もあり、大きな課題になる。 ● 希望した分野の情報が市から送られるメールサービスもある。ただ、自分で登録しないと届かない。情報を得ようと思ってもらうことが重要ではないか。 ● 企画展のアンケートによると、ポスターや新聞折込みではなく口コミやSNSで情報を得る人が多くなっている。今は口コミとSNSは同等と考えていい。SNSで情報を得るだけでなく、他の人を誘って参加するように仕向けることが仕掛けになるかもしれない。X、Instagram、Facebook等様々なSNSを計画的に投稿することは、紙による宣伝よりもコストパフォーマンスが良い。

項目	主な意見
紙媒体(広報ふちゅう)での情報発信	● 広報活動について、「広報ふちゅう」は特に高齢者にとって重要な情報源である。インターネットを利用できない人も、紙面だと情報が探しやすくなるため重要だ。 ● 「広報ふちゅう」は、改札にも置いてあるが、働いている人を対象にしており、高齢者は入手しづらい。他自治体では、スーパーマーケット等に自治体の広報物のボックスがあるが、コミュニティに近い場所で入手できる工夫をしてはどうか。 ● 広報誌は全戸配布ではないが、新聞の折込みに入っている。新聞を取っていない世代もいると思うが、市議会だよりはポストに投函されている。
【基本施策2】文化・芸術の担い手育成とそれを支える環境をはぐくむまちづくり	
【施策2】地域の芸術家に対する支援	
芸術家に対する支援	● 地域の芸術家に対する支援は、芸術劇場で「府中の森めばえコンサート」を実施しているが、出演当時はそこまです有名ではなかった方が、その後に様々な場でお名前を見かける存在になるなど、地域の芸術家に対する支援になっており、続けて欲しい。
【基本施策3】歴史と伝統により培われた府中固有の文化を大切にし、新たな文化を創造するまちづくり	
【施策1】文化財の保存・活用	
伝統文化の重要性	● 文化財や伝統文化に対して7割が親しみを感じており、これは府中の特色ではないか。まちの中心に大國魂神社やけやき並木があり、お祭りが盛大に行われていることが影響しているのではないかと思います。 ● 基本施策3は評価が高く、歴史と伝統が最も大切にされていると感じた。
【施策2】地域文化の継承と活性化	
文化資源の継承	● 次の10年、どのようにして次世代を取り込んで引き継ぐかが重要である。府中市立府中第一中学校の改築の際に、正門を元のまま残した。場所が消えると懐かしさや故郷に帰ってきたという思いが消える。文化の伝統を守り、新たな環境に受け継いでいく時には、これまでの形を残して継承するようにしたい。 ● 文化芸術の中での社会貢献についてルールづくりが必要ではないか。変わっていくこと、変わらないこと、残す、遺すことについて、市制施行70周年を機に見極めることが必要である ● 伝統芸能の継承については、日本の伝統芸能は各々に流派があるため触れづらいところがある。 ● 府中市には府中囃子があり、小さい子ども達も参加し、地域ぐるみで育てていく文化があることは、府中市における伝統芸能の継承としては成功事例になるのではないか。 ● 確かに伝統文化には流派があり、付き合いが難しい部分もあるが、行政や公益財団法人だからこそ流派を超えることができるのではないか。例えば、能が盛んな石川県では宝生流が強いが、全国で見るとそうではない。そこ

項目	主な意見
	で、公益財団法人が地域の流派と併せて全国の流派を積極的に取り上げることで地域の能楽自体を後押ししている。市民だからこそできることもあるが、流派争いや縦割りにならないように俯瞰で見ることも公益財団法人や行政の役割になってくる。それぞれの役割や方法論を見直し、次につなげていけるような計画づくりができると、これまでやってきたことが活かせるのではないかな。
文化資源のアーカイブ化	● 伝統芸能だけでなく、多様な府中の文化をアーカイブすることが、次の世代の府中市民にとって重要だ。オーラルヒストリーも含めて採取していくことが重要である。 ● 美術館や博物館はアーカイブをしっかりとしている施設が多いが、劇場やイベント系は比較的アーカイブされていない。祭りや伝統芸能だけでなく、消えてなくなってしまう文化、記憶にしか残らない文化があり、行政や公益財団法人はそのアーカイブに取り組むべきである。
【施策3】歴史、自然、文化が一体化した魅力的な景観の保全とまちの形成	
けやき並木への意識減少	● けやき並木への意識が減少しており、意外な結果となった。けやき並木通りの景観を心配する意見があったが、まちの中心にありながら、まちの中に埋もれてしまっているのではないかな。けやき並木の広場としての文化的な活用を考える必要がある。
【基本施策4】市内外から人々が集い、文化を通して交流とにぎわいが生まれるまちづくり	
【施策1】文化資源を活用した府中の魅力発信	
文化芸術のプロモーション	● 府中市が舞台となる芸術文化の作品として「ちはやふる」があり、競技かるたブームを引き起こした。このようなチャンスを逃さず発信しないとたいない。きっかけを市がつかないで、若い人たちにメッセージを送ることが重要だ。 ● 府中市のキャラクターについても発信するべきである。今は、子どもだけでなく、キャラクター好きの大人もいる。上手く露出し、丁寧に育てることで、グッズなども爆発的にヒットするのではないかな。チープな物ではなく文化芸術として品質が高い物を市内の老舗菓子店で商品化すると、外国人に向けてのアプローチにもなるのではないかな。 ● 府中の施設ではフォトスポットが上手く使われていない。景観を乱さない程度に、映えるよう工夫することで拡散につながるのではないかな。例えば、東京国立博物館では人気の企画展を開催する際に、来館者が併設されている庭園にも循環するよう工夫されており、上手く連携する仕掛けを作っていると感じる。チャンスを逃さないことが重要だ。

項目	主な意見
【施策2】地域社会での連携及び交流機会の充実	
つながる仕組みづくり	● 居住地域によって参加度にばらつきがある。文化を発信する施設同士がこれまで以上に連携し、総括的に情報発信をすることで府中市の文化度が上がるのではないかと。 ● 府中市には美術館や劇場などの資源が豊富にあり、既に様々な事業を行っているが、市民の自発的な活動を引き出す仕掛けとして、今までやってきたことと別の方法を試すことができれば広がりが生まれるのではないかと。
【施策3】多文化共生の推進	
多様性のある共生社会	● 資料2の5ページに多文化共生とあるが、在日の外国人や多国籍の人たちについて言及されておらず、アンケートの対象にもなっていないため、多様性という単語の方が馴染むのではないかと思う。 ● 多文化共生や多様性について、催し物をする外国籍の方が来てくれる。外国籍の方が所属している団体もあるので、小さなことから始められると良い。 ● 文化には、子どもから大人まで、年代や障害の有無などの属性にかかわらず多くの人を巻き込む力がある。多様性の推進においては、文化が最も武器になると考えている。文化を活用することで、様々な人がアクセスできるプラットフォームができ、そこで普段会えない人達と出会うことができる。自身の事業として小学生と障害のある人達とのワークショップを行った。府中市には、そういったことを広く展開して欲しい。